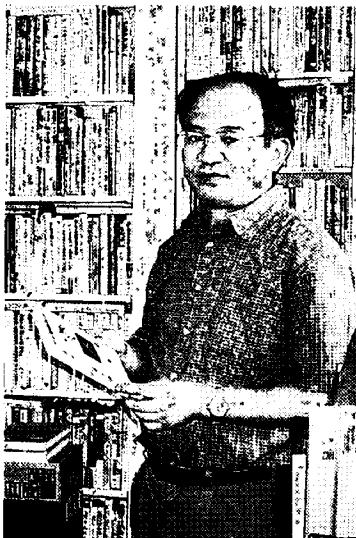


闘病記が根強い人気を保っている。病氣を抱えながら、勇気をもって生きる姿が感動を与えるのはもちろんだが、実際に病気になった患者にとっては、刺激を受け、エネルギーをもたらせる「癒やし」のツールになっている。専門に扱うネットの古書店もあり、注文が増加中だ。

みずほ信託銀行副社長の関原健夫さんの「がん六回人生全快」(朝日新聞社)や、元NHKアナウンサーの池田裕子(絵門ゆき子)さんが書いた「がんと一緒にゆきりと」(新潮社)といった書籍が話題を呼んでいる。いじした闘病記はかつては文学者など一部の著名人が書き残すだけで、出版も年に数冊とそれほど多くはなかった。

それが一九七〇年代に入つて急増、九〇年代には年間百点を超えるように。四年には百四十点を数えた。治療法などについての情報が豊富になり、いざ普通の人まで書くようになつたためらしい。自費出版として書き残すとか、自分の思いを家族に伝えたいという本も多いが、「病人の先達として苦労した経験を同じ病気に悩む人のために残したい」という前向きな動機も目立つ。



闘病記専門古書店「パラメドика」店主の星野さん

闘病記が専門家かもしれないが、病氣の苦しさ、病氣のもうたすものに一番通じるのはその病氣の患者自身だ。体験を共有する」とあり、注文が増加中だ。

みずほ信託銀行副社長の

因不明と診断されたりして、病名が確定するまでは

曲折がある。病氣への対処法、治療のあり方、手術へ

く例がある③ネット上に、闘病記をつけるサイトが急

増しており、その相乗効果で注目が高まつた――など

が考えられるといい。

パラメディカは九八年の返

なエネルギーや元気をもつたのが闘病記といえる。それが闘病記といえる。

わらたま市にある日本唯一の闘病記専門古書店「パラメドика」(<http://member.nifty.ne.jp/paramedica/>) では

この病氣の闘病記を病院へ送つてほしい」という注文を受けて直接病院に発送したり、「子供が脳に障害があるが、同じ経験の本はないか」と若いお母さんから

携帯電話で急ぎの電話が入つたりと、HISホームページにはこと欠かない。「医療相談もよく受けれる。『病友』というか、同じ病氣の人を探す手伝いをしてあげるのが私の役目」と話す。

「いのち輝く闘病記100冊から学ぶ」(看護の科学社)の著書がある山梨県立大短大部の前教授、前田志奈子さんは「確かに闘病記は増えている。病氣の人々の闘病記を最低三冊に転移して四年後」になつたとき、神田の古書店で手に入れた乳がん患者向けの米国の本が参考になつた。専門書ではよくわかるのか、患者への精神的ケアはどうしたらいいのか、夫や子供へのケアも大切だ

といつた包摂的な内容で感動した」と星野さんは振り返る。

闘病記からパワーもひく

パラメディカ推薦の「勧まされる闘病記」

書名(出版社)	著者	内容
知りたがりやのガン患者(農山漁村文化協会)	種村エイ子	子供たちに「死生学」を教えていた司書の著者が胃がんの体験つづる
看護婦ががんになって(日本評論社)	小笠原信之 土橋律子	ホスピス運動に打ち込む元看護師、土橋さんの子宫がん体験記
わかったか、白血病。相手みてからけんか売れ(メディアファクトリー)	池田泰佑	白血病を生き延びた15歳の少年のツッパリ日記
リハビリ医の妻が脳卒中になった時(日本医事新報社)	長谷川幸子 長谷川幹	医者の妻の看護師が脳卒中で倒れ、リハビリ専門医が奮闘
わたし糖尿病なの(医薬業出版)	南南昌江 加都子	幼児からインシュリン依存型糖尿病の女医とその母の前向きな本

体験共有が患者癒やす

専門古書店への注文急増

ツトの発達で現在はオンライン専門店に。百九十種類の病名別に一万三千冊がそろっている。乳がんだけでも八十三冊あるといふ。

○ ○ ○

「医師が一人前になるのに何人の症例を見るのが必要だが、患者も、同じ病

氣の人の闘病記を最低三冊読めば、自分の病氣のイメージをつかむことができると医師が話題になる②ことで闘病記が話題になる②病院内に患者図書館を設置するところが増えており、国立長野病院の「楽患ライ

(編集委員 原田勝広)